

えを持っていた。しかし、飲酒習慣では2群間で似たような傾向を示しており、特徴的な違いは認められなかった。

性格傾向としては、食改の方が何事にも真面目に取り組み、頼りがいがある傾向にあると考えられた。生活全般のQOLでは、食改の方が日々の活動や仕事に対する満足感が高く、自分自身に満足出来ていた。また、睡眠や余暇活動、情報量、生活環境全般に関して満たされており、生活を意味のあるものと非常に肯定的に捉えていた。女性群ほど2群間で顕著な差は認められなかったが、抑うつ感が低いため、精神面では食改の方が気持ちが安定していると思われた。また、物事に対処していく自信や精神的な幸福感・至福感はやはり食改の方が強く持っており、抑うつ感の低さとも関連していると思われた。

[女性について]

食改の特徴としてみられたのは、「配偶者と二人だけで」くらしている人が多く、職業としては、自宅にいる時間やゆとりの時間の多いと思われる主婦や農林漁業従事者の割合が高く、物理的にも健康や食生活の改善に向けて時間を割くことが可能である者が多いことが示唆された。また、食改の方が飲酒習慣が過度にならないよう気をつけていると考えられた。

性格的には食改の方が助け合いの精神や親切心に富み、活動的で出来るだけ多くの人と接しようとし、また、誠実できちんとしており、気持ちが動揺することも少ないと言えそうであった。神経質にはならないが、積極的かつ誠実に健康問題に取り組んでいると思われた。生活全般のQOLに関しては、食改の方が活動的で、心理的に穏やかかつ楽しく過ごしていると考えられた。また、周囲の人間関係や友人との関係も良好で、それが良き支えとなっているようであった。経済的な面や情報量、余暇などへの満足度も食改の方が高く、生活をより意味のあるものと感じていた。さらに、食改の方が気持ちが安定しており、落ち込みにくく、前向きな態度で生きていることや、軽症精神障害のスクリーニングに引っかからない精神的に健全な者が多い事が示された。

E. 結 論

食生活改善推進員の世帯員は、食生活改善推進員がいない世帯の世帯員より、健康的な生活をしていることが示唆されたため、今後の効果的な保健事業の一つのあり方として、事業を食生活改善推進員の活動を軸に展開することが有用である可能性がある。

今後、さらに解析を行い、地域特性に応じたより効果的な保健事業のあり方について検討する。

なお、コホートの再調査については、調査協力の調整および既存のデータについての詳細分析に時間を要しており、また、青森県の事業として11年度予算中に当該研究と関連するものが検討されているので、効率性を考慮する観点から、県の決定を待って再調査する計画とするよう見直した。次年度もコホートとしての再調査を引き続き計画してゆくが、その財源は本研究班だけでは充分ではないので、他の研究班との共同研究を積極的に推進していく予定である。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 吉村公雄, 中村健二, 大野 裕, 桜井昭彦, 斎藤直子, 三谷美津江, 山内慶太, 小野田直子, 浅井昌弘. 5 因子モデルによるパーソナリティの測定—NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI)の信頼性と妥当性. ストレス科学, 1998; 13(1): p. 45-53.

2. 学会発表

1) 斎藤直子, 中村健二, 吉村公雄, 山内慶太, 大野 裕. 青森県における自殺率と心理社会的背景について. 第14回日本ストレス学会学術総会. 1998, 東京.

G. 知的所有権の取得状況

なし

199800716A

報告書 P. 39-45は下記に掲載

**A Prospective Cohort Study on National Health Insurance Beneficiaries
in Ohsaki, Miyagi Prefecture, Japan: Study Design, Profiles of the
Subjects and Medical Cost During the Fiscal**

Ichiro Tsuji, Yoshikazu Nishino, Takayoshi Ohkubo, Aya Kuwahara, Keiko
Ogawa, Yoko Watanabe, Yoshitaka Tsubono, Takehiko Bando, Seiki
Kanemura, Yoko Izumi, Atsushi Sasaki, Akira Fukao, Mitsuaki Nishikori and
Shigeru Hisamichi

Journal of Epidemiology. Volume 8 Number 5, pp.258-263, 1998

199800716A

報告書 P. 46-50は下記に掲載

生活習慣と医療費との関係について—大崎国保コホート研究から—
辻一郎, 泉陽子, 久道茂
社会保険旬報. 1986号, pp.6-10, 1998

199800716A

報告書 P. 51－57は下記に掲載

Medical Cost for Disability: A Longitudinal Observation of National Health Insurance Beneficiaries in Japan

Ichiro Tsuji, Aya Kuwahara, Yoshikazu Nishino, Takayoshi Ohkubo, Atsushi Sasaki, and Shigeru Hisamichi

Journal of the American Geriatrics Society. Volume 47 Number 4, pp.470-476, 1999

199800716A

報告書 P. 58-66は下記に掲載

5 因子モデルによるパーソナリティの測定 - NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI)の信頼性と妥当性

吉村公雄, 中村健二, 大野裕, 桜井昭彦, 斎藤直子, 三谷美津江, 山内慶太, 小野田直子, 浅井昌弘

ストレス科学. 13 巻 1 号, pp.45-53, 1998

199800716A

報告書 P. 67は下記に掲載

基本健康診査受診歴と医療費との関連

西野善一, 辻一郎, 桑原理, 大久保孝義, 寶澤篤, 久道茂, 佐々木淳
日本公衆衛生雑誌. 45 卷 10 号特別附録, pp.173, 1998

199800716A

報告書 P. 68は下記に掲載

高齢者に対する持久性運動訓練の効果：RCTによる検討

辻一郎, 永富良一, 玉川明朗, 大久保孝義, ソバジエ・カトリス, 寶澤篤, 渡
辺洋子, 大森浩明, 久道茂

日本衛生学雑誌, 54 巻 1 号, pp.283, 1999

199800716A

報告書 P. 69は下記に掲載

**お年寄りにリズムやストレッチ. 全身持久力が改善. 東北大のグループ
研究. 運動半年「5歳若返り」**

信濃毎日新聞. 平成11年1月5日(火)夕刊.

平成10年度厚生科学研究費補助金（健康科学総合研究事業）
「保健サービスの効果の評価に関するコホートおよび介入研究」
(H10-健康-025)

平成10年度研究報告書（平成11年3月）

発行責任者 主任研究者 辻 一郎
発行 仙台市青葉区星陵町2-1
東北大学大学院医学系研究科
社会医学講座公衆衛生学分野
電話 022-717-8121
FAX 022-717-8125

